

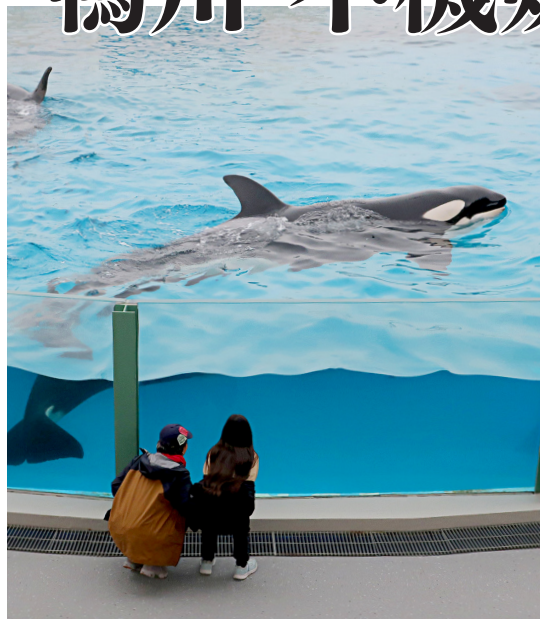
眞平新報

2025年
(令和7年)
March

発行者 眞平
http://s-shimpei.com/



鴨川 不機嫌旅行



実物のシャチの大きさには流石に驚いていたのだが
(このあと原因不明のまま次第に機嫌が悪くなる)

春休み直前の23日から一泊で安房鴨川へ家族で訪れた。旅の目的は鴨川シーワールドのシャチだった。8



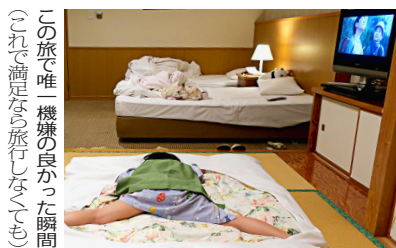
道中で寄った館山の「さかなクンギャラリー」(「思ったのと違うから出よう」という早速の天邪鬼ぶり)

子どもの希望で着々と進んでいた旅行計画だったが、出発前日になって、やっぱり行かない、と信じられないことを言いはじめた子どもに対し、怒りを通り越して、落胆の気持ちしか湧かなかった。

それでも旅行当日は、なんとか出掛ける運びとなったのだが、道中は不平不満を垂れるばかりで、ホテルのベッドで横になり、テレビを観ている時だけは機嫌

良くしているのだった。

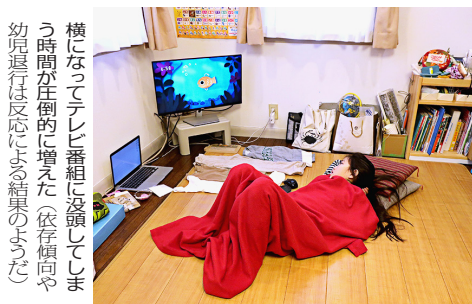
肝心の鴨川シーワールドでも何かにつけて文句を言うので、最終的には言い争いになってしまった。最近、子どもと出掛けるといつもこんな調子なので、しばらく一緒の外出は避けたい。



この旅で唯一機嫌の良かった瞬間
(これで満足なら旅行しなくても)

過ぎてゆくへくはないと腹を括っている。

それでもしかし、来年度こそは、子どもにとって良い出会いや巡り合いがあることを願いたいものである。運任せの義務教育の弊害だ。



横になってテレビ番組に没頭してしまいう時間が圧倒的に増えた(依存傾向や幼児退行は反応による結果のようだ)

来年度の希望は運任せ 親子で苦しんだ一年

子どもの過剰な行動や過敏な反応に加え、学校への行き渋りや不登校に翻弄され、親も子ども本当に苦しめられた一年が終わろうとしている。

年度が変わるからといって何かが良い方向に劇的に変化するというもの



子どもの元気づけのために友人が清涼飲料水をケース送ってくれた(こうした気遣いにより家族で救われる)

撮

親の心配を他所に余裕の面持ちで出掛ける子ども(帰宅時間も余裕で破る子ども)



「自転車で」一人外出

まだ数えるほどしか一人で出掛けたことのない子どもだが、今回は「自転車で」一人外出という新たな不安要素が加わったのである。
この日は結局、帰宅時間を守らなかったため、あまり良い結果にはなかったのだが、私だってなんでもかんでも禁止にはしたくないが「約束を守る」という最低限の信頼関係は築いておいて貰わないと困る。

今月の視聴覚

記録と記憶

ヘルシンキ 2024年 朴沙羅 著
生活の練習はつづく 314頁

先月に引き続き続編を読了。また世界や社会を知らないが故のユキの率直な言葉が滑稽ながらも鋭く突き刺さる。フィンランドは決して理想郷などではなく、私たちは私たちの生活をしっかりと積み上げ、練習を繰り返しながら社会を作り上げていくしかない。

2020年 301頁
書籍 地上に星座をつくる 石川直樹 著
死と隣り合わせの世界にわざわざ出向いていく人がいる。なんでまた、と思いつつも、私はそうした人の見てきた世界を書物の中で垣間見て、その度に感嘆し、都会の片隅で、静かに本を閉じてきた。そしてまた、命知らずの冒険家が、私の本棚に加わった。彼らは一様に、自らの身体を通して世界の解釈を試みる。

日本語からの祝福、日本語への祝福
2025年 李琴峰 著 274頁
書籍

日本語への知識と愛情の深さが散らばられた一冊。不言実行の不屈の精神と興味関心の豊かな感性に裏打ちされたこの著書にして「彼岸花が咲く島」が書かれたのかと思うと感慨深い。

2023年 601頁
書籍 黄色い家 SISTERS IN YELLOW 川上未映子 著
貧困の連鎖の生々しさを見事に物語に落とし込んだ凄惨な作品ではあるのだが、貧困の中でもまだ寄り添うことのできていた時代から、今はすべてが失われてしまっていることに愕然とさせられる。主人公の花と同世代であるが故に、物語の生々しさに拍車がかかる。こうやって生きていくしか無かった、という選択肢の乏しさこそが貧困の畏だ。